

- 1 ババロアを震わせすぎている余寒
- 2 花冷えや赤信号が長すぎる
- 3 淋しくて流水になってしまっそう
- 4 苗床の光ばかりが伸びてゆく
- 5 昨日まで音符のひとつだった仔猫
- 6 山吹の咲いて絵の具の不足する
- 7 我儘(わがまま)も許そう一面の菜の花
- 8 水張った鍋で飼おうか朧月
- 9 七色のすべては見せぬしやぼん玉
- 10 罪のない浮気が好きで桜貝
- 11 名を呼べば咲いてみせよう沈丁花
- 12 骨盤を締めて春一番の吹く
- 13 馬の子のスタツカートで生まれくる
- 14 おむすびは五月の穴へ転がりぬ
- 15 安曇野の額縁抜けて風薫る
- 16 結論を急いで新緑山染める
- 17 身の内に蠢く(うごめく)ものあり青田風
- 18 永き日の不埒(ふらち)な夢を裏返す
- 19 春の宵無言電話が艶かしい
- 20 神様に触れた気のする春の闇
- 21 蓬(よもぎ)摘む毒なら致死量分ほどの
- 22 仔猫なら黙って愛してあげたのに
- 23 爛春(らんしゅん)や風になりそこねたバイク
- 24 野遊びの後は迷子になる予定
- 25 さよならを繰り返すだけ猫の恋
- 26 おしやべりがとまらなくなる花林檎
- 27 いぬふぐり笑い転げて咲いてゆく
- 28 目の奥を光で洗う日永かな
- 29 犬の尾に煽がれている夏の空
- 30 海賊になる夢を見る南風(みなみかぜ)
- 31 夏の月遠くの空で発酵す
- 32 麦秋や風の尻尾をつかまえる
- 33 青葉風自由という名の自己責任
- 34 脳みそをかき混ぜている油照り
- 35 白玉のなめらかさで吐く(つく)嘘ひとつ
- 36 死神のノートに描かれし青林檎
- 37 自己愛が強くて百日紅(さるすべり)に生まれ
- 38 人見知り直らぬままのねむり草
- 39 赤ん坊(あかんぼ)の声にそよぐは風知草
- 40 苔の花風の生まれる音を知る
- 41 告白の言葉は持たぬ合歓の花
- 42 恋の唄聴かせトマトを赤くする
- 43 花氷記憶の色を吸って咲く
- 44 胸中の過去の男が夕焼ける
- 45 角砂糖かじって透ける夏の月
- 46 天瓜粉(てんかふん)はたき天使の背になりぬ
- 47 向日葵になつてあなたを待っている
- 48 夫(つま)と子を捨てる休日ゆすらうめ
- 49 てのひらに浮気な蛍を飼い続け
- 50 炎天や女は子宮で嫉妬する

- 51 胸元の傷より赤いかき氷
- 52 爪切りの音湿りたる熱帯夜
- 53 金魚の尾男をかわす度(たび)ひらり
- 54 幽霊にならぬようにと靴を買う
- 55 夏休みの半分は光でできている
- 56 ソーダ水透かせば恋の予感する
- 57 友の目に花火わたしの手にあなた
- 58 淋しさを融(と)かせば九月の雨となる
- 59 カレー煮るお玉の中にある残暑
- 60 ビー玉を割れば飛び出す流れ星
- 61 空っぽの言葉の上に紅葉散る
- 62 あの人に触れられたくて桃になる
- 63 曼珠沙華最後の女になりたくて
- 64 無花果を切って言葉のあふれだす
- 65 体内の女叫んでいて石榴(ざくろ)
- 66 秋の蝶奪われたくてまだ生きる
- 67 血の色の林檎は罪を分け合いぬ
- 68 魂を肥えさせている夜長かな
- 69 幾億の嘘を集めて銀河にす
- 70 吾亦紅夕陽砕いて飲み込めり
- 71 台風の目の中にある殺意かな
- 72 デッサンを狂わせている稲光
- 73 人生の分岐点で降る秋の雨
- 74 万歳をすれば指先月に触れ
- 75 子の髪は秋の実りの匂いして
- 76 こおろぎの隣で詩人になりきれず
- 77 ねこじゃらし風が歌えば指揮をする
- 78 かくれんぼ飽きてかりんの香り出す
- 79 目的地忘れて今は赤とんぼ
- 80 砂糖水舐めてきれいな虫の声
- 81 くちづけと同じ形で葡萄吸う
- 82 いちいの実甘やかされると泣けてくる
- 83 セーターを脱いで心細くなっている
- 84 放課後の匂いがしている秋茜
- 85 大根の煮え切るまでの逢瀬かな
- 86 北風にそそのかされて帰宅拒否
- 87 星々の電池を替える寒夜かな
- 88 真冬日や人差し指が人恋しい
- 89 深海魚雪の白さを夢に見る
- 90 血の色は無色透明雪蛍
- 91 枯園へ真っ赤な靴を履いてゆく
- 92 口数を減らし冬桜になりぬ
- 93 初恋を眠らせるために降る粉雪(こゆき)
- 94 冬の蝶影から先に死んでゆく
- 95 折り紙の船で漕ぎ出す冬の海
- 96 沈黙の数だけみかん転がしぬ
- 97 マフラーをしても帰るとは限らない
- 98 捨てられぬ指輪をはめたまま二月
- 99 包帯を巻いてもらって冬眠す
- 100 ポケットでキャラメル笑う小春日和